

古今東西、昔から伝えられているおとぎ話から現代の映画やマンガまで、お金や経済にまつわる物語は数え切れないほどたくさんあります。
今回は、江戸時代の旅にかかった費用のあれこれを、江戸後期の滑稽本「東海道中膝栗毛」からご紹介しましょう。

第7回

江戸時代の旅の費用

「東海道中膝栗毛」

日本で庶民の旅が発達したのが江戸時代。これに一大ブームとなったのが伊勢参りです。江戸からはもちろん、もっと遠方からも伊勢をめぐりました。庶民にとって旅の費用は大金です。そこで、村単位などで「講」という組織をつくり、皆で積み立てたお金で、講の中の代表者が出かけるという形を取ることが多かったようです。

「東海道中膝栗毛」はご存じ、弥次さん・喜多さん、が、「栗毛」の馬の代わりに「膝」、つまり徒歩で東海道から伊勢さらには京大坂をめぐるります。

江戸から伊勢までは徒歩で10日以上かかりました。草履はすぐに履きつぶしてしまいますから、途中で買い替えなければなりません。

こんなエピソードがあります。
履物屋の主人から草履1足十六文と言われ

た弥次さん。左右の大きさが違うと指摘し、「大きい方を九文で買うから、小さい方を七文に負けてくれ」と頼みます。主人が了解すると、今度は「1足買おうと思ったが銭が足りない。もう片方は、旅の先で買うから、七文の方だけ買うよ」と言い出します。こうして結局両方も七文ずつ、1足十四文に負けさせました。

旅の難関のひとつが川越えです。大きな川は、川越人足に肩車をさせたり、台のようなものを担がせ、それに乗って渡らなければなりません。また増水すると川止めとなり滞在費用がかさんでしまいます。

弥次喜多コンビが安倍川にさしかかったところ、前日の雨で水かさが増しているので、1人六十四文は高値だがやむをえないと納得。増水した川に落ちてはたいへんと戦々恐々としなが

らも無事渡ることができたので、心付けに酒手十六文を上乗せして支払います。ところが川越人足は、川上の浅いところを通って楽々と戻っていくではありませんか！「ちくしょう、ふんだくられちゃった」と気づいても後の祭り。

このほか、「湯はぬるくてよい、食事は少しでよい」というおかしい理屈で、宿代「二百文を百六十文に値切ろう」として失敗する旅人が登場したり、この物語にはお金をめぐって、やった・やられたのユーモアあふれるエピソードが詰まっています。

こんな悲喜こもごもの旅が人気を博し、金比羅や善光寺、草津温泉などへと弥次喜多二人の旅は続きます。江戸時代は宿代や人足代、茶店みやげ物を解説した道中記や諸国の名所図会が数多く出版されました。「東海道中膝栗毛」も旅のガイド本としても、読者が共感したのかもしれませんね。

